

『ジャン・クリストフ』第 3 巻 八、女友たち 片山敏彦訳

報告 中田裕子

朗読 松田由美子・中田裕子

その少し後にクリストフはジャクリーヌから手紙をもらった。

クリストフにもう会わなくなったことを彼女は残念がり、そして、もしもクリストフが彼を愛している二人の親友の心を悲しめたくないなら是非訪問してほしいととやかに彼を招待していた。クリストフはすっかりうれしくなった。

クリストフはオリヴィエを再び訪ねて行ったが、彼は喜んで迎えられた。

若い夫婦相互の状態はよくなっていなかった。むしろ悪化してさえいた。ジャクリーヌはますます倦怠気分には陥っていた……

ジャクリーヌは所在のない気もちで生きていた。鋭い剣のきっさきで刺されるように愕然とする瞬間を何度も味わっていた。彼女は思った

「あたしは何のために生きているのだろうか？ いったい何のために生まれてきたのだろうか？」と。

彼女に結び付いて彼女の生活を窒息させているオリヴィエを彼女はますます悩まさずには居られなくなり、そうやって腹いせせずには居られなくなった。そうしておいて彼女は一層がっかりしそして自己嫌悪に陥るのだった。

彼女は、彼女を愛し、そして倦怠の淵から引きずり上げて支えてくれるような誰か一人の人間を尋ね求めていた……絶望的な彼女の呼びかけに、沈黙以外の何の応答も来なかった。彼女はクリストフを全然愛していないのだった。しかし、少なくともクリストフは強いという感じを——死の淵に抵抗する力のある巖だという感じを彼女はもっていた。

自分の夫をその親友達から引き離しただけではまだ足りず、今度は夫からその親友達を奪い取って自分のものにせずには居られなかった。

クリストフはオリヴェ夫婦の自動車旅行に数日間同行した。そしてランジェー家がブルゴーニュに持っている別荘で、彼はオリヴィエ夫婦の客となった。

彼女を見、彼女の言葉を聞き、この優美なからだに軽く触れ、彼女の口の息をのみ取ることによりクリストフは、無邪気な、しかし非物質的でもない、一つの楽しさを味わった。

オリヴェはいささか心配になりながら黙っていた。

#### 朗読 1

クリストフは「ル・グラン・ジュルナール」の彼の庇護者たちを敵にしまった。

新聞社主催の広告宣伝のお祭り騒ぎのためにばかげた歌の作曲をクリストフが頼まれて拒絶したことは、彼らを憤慨させた。彼らはクリストフの仕打ちの不当さをクリストフに思い知らせてやる気になった。クリストフは無造作につっぱねた。クリストフ征伐が開始された。(クリストフは他の音楽家たちの靈感を盗み取ったと指摘され、若い芸術家たちの活動を妨害したという非難の声も挙げられた。クリストフがドイツ人であるというその事実を音楽上の非難の的とした。)

大げさに見える彼の無遠慮な流儀によって、偏見のない人々さえもいらだたせ、ましてや偏見のある人々をいらだたせる結果になったのもやむをえなかった。

クリストフの味方として力強い解答を世に与えることのできたはずの唯一の人オリヴェは今では、クリストフから離れて、彼を忘れ去ったかのようにだった。

誹謗はつづいていった。そして世間の人々は、最も愚劣な、最も不名誉なさまざまな非難を鵜呑みにしていた。

クリストフは自分が困難な立場に置かれているのを少しも感じないかのように、まさにこんな時期を選りによって、彼の楽譜の出版者と仲違いをした。

七重奏曲がアレンジされて四重奏曲に、また単独で弾くピアノのための一連の曲が拙劣に書き換えられて連弾の曲になっていた。

#### 朗読 2

彼は、ヘイトが半月後に申し出て来た条件を受諾した。彼は自分の楽譜を支払われた五倍も高い額で買い戻したのである。クリストフにはとても払えないのだった。ヘイトはクリストフに、ヘイトの世話なしには容易にやっていけるものではないことを覚らせたかった。もしも半年以内に支払うべき金を払えないなら、作品は全てヘイトの者になるということに決まった。クリストフは全額の四分の一も払えるようにはなるまい、とヘイトは見込みをつけた。

それでもクリストフは強情に、なつかしい思い出に充ちている住居を見捨て、いろいろなものを売り払った。仕方なしに借金をし、モークの好意にすがりに行き、他の出版者に相談にもいった。

彼は出版者相手の勝ち味のない、骨折り損の争いを、彼の自尊心からやっていた。そのために時間と精力と金を無駄に失い、また、ヘイトが彼の音楽作品を普及させることによってできていたその一般的人気をわざわざみずから求めて彼の方から断念するつもりになっていた結果、彼は唯一の武器も失いつつあった。

### 朗読3

彼はむしろパリ全体を避けていたのだった。親愛な孤独のなかへ数週間隠れ家を求めにいきたくなっていた。ああ、たった数日だけでもいい、生まれ故郷へ帰って、あそこで元気づけられたどんなにいいことか！しかし、自由を失う危険を冒さずには彼に出来ないことだった。ドイツを脱出した時と同じ逮捕命令は、今も彼から取り払われていなかった。

それについて彼は、彼の新しい保護者の一人に話してみたが、これが偶然な幸運のきっかけになった。彼の作品が演奏された夜会で出会った、ドイツ大使館の青年外交官はクリストフに事の次第をたずねた。それから二三日してその青年はクリストフを訪ねて来て言った。

「上の方ではあなたへの関心が大きいですよ。—————

—————あなたに対して出されている逮捕命令はすぐに撤去させることはその人物にもできないですが、しかしあなたが、ご自身の親しい人々と再開するために四十八時間を限

ってあなたの故郷の町に居られても、それは黙認されるでしょう。これが旅券です。ドイツへの入国と出国のときの旅券査証はあなたがうけてください。慎重になさってくださいよ。ことさら目立つことはなさないように」

#### 朗読 4

彼女はたいそう元気な早口な話し方で、クリストフから問われるのを待たずに早くも自分の生活のことをあれこれと話した。彼女の多弁と騒々しさとにクリストフはめんくらってしまって、話されていることの半分しか頭に入らず、啞然と彼女をみつめていた。これがあの可愛らしいミンナなのか！

その間も彼女は話をやめなかった。自分の過去のことや私事に互るいろいろな出来事や夫について。

ミンナはのべつに話しつづけた。次にはクリストフのことを話しだした。

彼女の環境の中で精神的に変化している人間はクリストフ以外には誰もいなかった。

彼らはその隣人たちを嘲笑うための種を見つけようとして、鵜の目鷹の目であり、自分たちと流儀の違うものすべてを嘲笑をするものとみなすのだった。

彼は外国での自分の生活について話そうとしてみた。だがたちまち彼らにフランス文化と文明について解らせることの不可能を感じさせられた。———彼自身それによって悩まされ、今では彼に親愛なものとなっているフランス文化と文明を今この瞬間に自分の故郷の中で代表していた———その第一の掟が知性であるところの、あの自由精神を。その知性とは、いわゆる「道徳」を軽視することの危険を冒してでも人生についてできる限りよく理解しようと努める知性である。

———欠点でもあれば美点でもある尊大さ———自分の美德を自慢にし、自分が事情を知ることのできない他人の過失を侮蔑する、思いやりのないあの正直さ、形にはまった行儀の良さへ崇拜、「不規則な」卓抜さへの憤激的な侮蔑。

#### 朗読 5